

古代伝承における流水去来の想念

—流れくるものと流れゆくものへの祈り—

青 木 敦

一、ゆく河の流れ

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

〔方丈記〕

と嘆じたのは鴨長明であった。古来、中世的無常観の象徴のように考えられている有名な詞章ではあるが、長明をしてかく観想せしめたこの流水去来の想念は、実は遠い蒼古の世にその源流を発しているかのようである。

人は常に、流奔去来する水辺に臨むとき、自己の佇つその場所を定めてここを基点とすれば、流水は必ず、見も知らぬ何処からか此処に流れ来て、そしてすぐ、果て知らぬ何処かに流れ去ってゆくこととなる。海鳴りの磯を打つ潮の流れも、岸草を洗い続ける川の流れも、いま己れの位置する此処なる場所に対して、限りなく流れ来、流れ去るものであり、去来する流水のこの二つの様態は、古き代の人にとつ

て、未知なる未来と見果てぬ過去との両極界に対する限りない憧憬をつのらせるものであった。

それでは、古来のわが神話・伝承は、これらをどのように受けとめ語り継いできたのであろうか。それらについて考察を進めてみたい。

二、流れゆくもの

—祓除の思潮—

然れどもくみどに興して生める子は、水蛭子^{ひるこ}。此の子は葦舟に入れて流し去てき。次に淡島を生みき。是もまた、子の例には入れざりき。

〔古事記〕上巻

とは、イザナギ・イザナミ二神が最初に生みそこなつた子を、葦舟に入れて流し捨てたという神話である。『日本書紀』には、

遂にみとのまぐはひして、先づ蛭児を生む。すなはち葦船に載せて流しやりてき。次に淡州を生む。これまた児の数に充れず。

(巻第一 一書)

次に蛭児を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫛あめのいし樟船くわだぶねに載せて、風の順に放ち棄つ。(同一書)

など、同曲の神子放流の伝承が語られる。そして、その不吉なみ子が生まれたわけは、

女、先に言へるに因りて良からず。

〔記〕

陰神まづ喜びの言を発ぐ。既に陰陽の理に違へり。

〔紀〕

として、婚姻の儀の不備と古代倫理の軽視が原因であった、というのである。

沖繩や薩南諸島に伝えられている異郷「ニライカナイ」は「常世」と共通する想念で類似するが、そこは、海彼の豊穰と至福の楽土であると同時に、また一面で地下の世界、死者の住界とも考えられたらしい。その聖なる島から神々や精霊たちが海を渡ってこの世にやってくるとも、あるいはまた、死霊がそこに往生し凶なるものが小舟に載せられて流されてゆくとも語り継がれたニライカナイ。これらもまた古き流水去来の想念と無縁ではあるまい。

有名な装飾古墳の一つ、福岡県の「珍敷塚古墳めずしつか」では、石室の奥壁の巨石に不思議な壁画が描かれている。画面の左半分には、一人の人物が棹さしている小舟が描かれ、その舟の舳には水先案内らしき鳥がとまっている。そこは昼の世界らしく、舟の上空には太陽と思われる同心円の文様があるが、いまその小舟は舳を右側に向けて、右半分の、ひき蛙などの描かれた夜の世界へ入って行くこうとしているらしい。ひき蛙は、古く中国では月中に住むと信じられた夜の生物でもあ

った。そして、実はこの画面は、昼と夜の世界の対比に託して、光と闇に象徴された生と死の世界を描いたものではないかと考えられている。鳥が、死界への案内役や葬儀の立会い役だという徴証は、たとえば、『記・紀』の「天の若日子」にまつわる「雉子の鳴女」や、その葬儀に従事したという多くの鳥たちの物語などからも推すことができる。つまり、生界から死界へ赴く神話的絵画で古墳の壁面を飾ることによって、この奥津城に埋葬された死者への鎮魂と呪封を祈念したものでないかと思われる。これら墳墓に葬られた主たちもまた、死出の小舟に載せられて冥界へ流れて行ったのであろう。それはまた、『万葉集』の挽歌の詞書に誌す「逝く水、留まらず(巻三)」という死界への流路でもあった。

こうして、これらの古き呪儀には、不吉なるもの・禍いなるものを水の流れに託して、どこか行く方も知らぬ世界の果てに放し棄てようという呪的な祈りが籠められていたことがわかる。そしてまた、これらの呪儀は当然、古来の水辺の禊祓の信仰と密接に係わり合ってくるのであるが、ここではあくまで「流動する流水」の呪効と想念にだけ論旨を絞ってゆくことにする。

流れゆく水に放棄・消滅の強力な呪効を期待した典型的な例証を、大祓の祝詞に見ることができ

……遺る罪はあらじと祓へたまひ清めたまふことを、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織つ姫といふ神、大海原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒塩の塩の八百

道の八塩道の塩の八百会に坐す速開つ姫といふ神、持ちかか呑みてむ。かくかか呑みては、気吹戸に坐す気吹戸主といふ神、根の国・底の国に気吹き放ちてむ。かく気吹き放ちては、根の国・底の国に坐す速さすら姫という神、持ちさすらひ失ひてむ。かく失ひては、天皇が朝廷に仕へまつる官々の人どもを始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪はあらずと、……

〔大祓〕祝詞

莊重・華麗に誦み上げられるこの蒼冥な代の呪詞の、その一言一句に籠められた強烈な「祓へ」の思念に、あらためて驚くほかはないが、この世から祓い追われて川の流れに放ち棄てられた「許多の罪穢れ」は、そこから激流に巻かれて大海原へ、さらに凄々たる海の深みに、いやはてには溟々の地底の暗黒の奈落の奥にまで、果てもなく追い落される。その呪界水流の所要所にひそみうずくまる水界の妖精のような神女たちによって、「くさぐさの罪」は次々とリレーのように手渡され飽くこともなく送り続けられてゆく。徹底的に、執念深いまでに、追いやらい祓え放とうという祈念と願望の何と深く激しいことか。

スサノオノミコトによって退治されたと伝えられる出雲の凶しき異類ヤマタノオロチの残骸は、「肥の河、血に変わりて流れき。〔古事記上巻〕』という凄惨な描写で語られるが、この邪神のどす黒き血は斐伊川の波浪とともに流れ去り洗われて、死闘の鳥髪の地に平安がよみがえり、新しき出雲国の朝霧の中に、降臨した若き英雄神の神婚が行なわれたと『記・紀』は伝える。

こうして、不吉なるもの・穢れたるもの・凶しく邪しまなるもの・禍いあるもの、そしてこの世の罪と悪のくさぐさのものを、水の流れとともにこの世ならぬ異界の涯に送り放し消し去ってしまいたいという祈りと期待は、やがて、流れゆくものに託す滅罪・追放・廃棄・忘却・消失の想念として、その後の伝承や芸能・民俗に多彩な波紋を描いて伝わってゆく。「水に流す」という古諺の系譜がそこにある。

たとえば、災害や疫疾をさまざまなものに寄託・憑依して、流水に放ち送る多くの行事がある。稲の害虫を捕えて藁つとに入れ、また虫をかたどった藁形を水に流し放って農耕の無事と豊作を祈念する「虫送り」の行事。神の形代として作られ、祭りのあと神霊の退去とともに水に流される古き「人形」たち。そしてまた、三月節供のあと供物とともに川へ流す「流し雛」。あるいは「七夕」の飾り物を川に流し、そして、「ねぶた流れよ。まめの葉よとまれ」と唱えて飾り物を海や川に流し、また、笹の葉で身体を撫でては水に流した「ねぶた」の祭り。古い魂祭りを伝える盂蘭盆の「精霊流し」や「灯籠送り」などなど。いずれもそこに共通するのは、この世の一切の不吉なる事物や現象を、この世のある特定の地点から水に流し去って、遠きこの世ならぬ異郷や死界に送り込み棄て去ろうという切なる祈りにほかならなかった。それゆえにこそ、大祓の祝詞はその最後を「四国の卜部ども、大川道に持ち退り出でて祓へ却れ、と宣る」と、水辺祓除の祈りを厳しい詞章で締めくくる。

行く水は流れ流れて行く方も知らぬさいはての異界遙かに消え去

り、その流れに託したくさぐさのおぞましき凶しきものどもは、もう再びこの世には戻ってこないであろう。いや、決して戻らせてはならない。神よ戻らせ給うな。

この想念はまた、生きた人々をも敵しい対象とすることでもあった。悪しき罪咎をその身に負うたと断じられた罪人たちは、そのまま罪過の化身として、このまともなる世に生き住むことを拒まれる宿命にあった。これら現し身の人たちもまた、流し放たなければならぬ対象であった。古く流罪は「流(はな)つ」と訓んだ。地の果て荒海の彼方に流しやるがために、これら罪の人々は「流人」ともよばれた。人もまた流し捨てられたのである。

三、流れくるもの

——来迎の思潮——

故、大国主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より天の羅摩船かがみのふねに乗りて、鵜ひびしの皮を内剝ぎに剝ぎて衣服にして、帰り来る神ありき。
〔古事記〕上巻)

古き出雲の美保の海辺に流れ寄ってきた小さな小さな神「スクナヒコナノミコト」の漂着の様子を『古事記』はこのように伝える。同じ伝承を『日本書紀』はまた、

一箇の小男ありて、白鷺かがみの皮を以て舟につくり、鶴さざきの羽を以て衣にして、潮水しほのまにまに浮き到る。
(卷一 神代上)

と誌す。これこそ、永遠の楽土・常世の国からこの世にやってきたため

ずらかな貴き小さき子神の聖なる漂着来臨であった。

この世の浜辺に、あるいは岸辺に、いづくからともなく漂い寄り流れくるものは、いづれもめづらかにして貴く聖なる性格として想念されたかのである。これら尊貴なるものが寄り来るのは海辺ばかりではない。秘やかな深山の幽邃な溪谷の源流からも、神は聖なる流れとともに下ってきた。

此間に媛女あり。是を神の御子と謂ふ。その神の御子と謂ふ所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比売せやだたらひひめ、その容姿麗美しかりき。故、美和の大物主神、見感でて、その美人の大便にねりやまれる時、丹塗矢にぬりやに化りて、その大便なまれる溝より流れ下りて、その美人の富登を突きき。ここにその美人驚きて、立ち走り伊須須岐伎。乃ちその矢をもち来て、床の辺に置けば、忽ちに麗しき壮夫に成りて、即ちその美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比売命と謂ひ、亦の名は比売多多良伊須須岐比売と謂ふ。故、是を以ちて神の御子と謂ふなり。
〔古事記〕中巻)

とは、神武天皇の正后イスケヨリヒメの出生にかかわる、いわゆる「丹塗矢」の伝説である。同曲の説話は『山城国風土記』に、

玉依日売、石川の瀬見の小川に川遊びせし時、丹塗矢、川上より流れ下りき。乃ち取りて、床の辺に挿し置き、遂に孕みて男子を生みき。
〔山城国風土記〕逸文)

とあって、こちらは賀茂社の縁起と、賀茂一族の祖神を願わす神婚譚として伝えられている。いづれの場合も、神霊の憑依した赤い矢が、

必ず川の上流から流れ下ってきて、選ばれた水辺の処女と神婚するところが主要なモチーフとなっている。もちろんこれらの説話も前節で扱った「禊祓」の場合と同様、水辺の巫女の呪儀に関する分野にかかわってゆくテーマではあるが、ここでもあくまで「水流を流れ下る聖なるもの」にだけ焦点を絞ってゆきたい。

めずらかな小さな「神童」が川上から流れ下ってくる話はほかにもある。

天皇（欽明）一夕夢、有神童言曰、我是秦始皇之後身也、以有縁生於日域、請為臣矣、時大和州、有洪水之變、初瀬川大漲、有大甕流来、止于三輪明神廟前、土人聞之視、則有一男子、身体如玉、土人奏之、天皇曰、所夢見者此人也、拳養之、賜姓曰秦氏、其才智与年相長、至十五歳、授大臣位、（後略）

〔本朝神社考〕五

推古朝ごろの官人で、聖徳太子の信任厚かったと伝えられる渡来系の才子「秦河勝」の出生にまつわる伝説である。同様の伝えはほかにも、

秦川勝、秦始皇之後身、欽明帝朝、和州初瀬川洪水、得大甕、中有児成長、賜姓為秦、依川出故名川勝、

〔和漢三才図絵〕七二

とあって、いずれも川上から流れ下った異しき甕壺の中から現われた貴子・神童の物語であるが、これらの、流れ下ってくる聖なるもの・めずらかな小児などの話は、後世に多彩に拡散する。

人口に膾炙する「桃太郎」「瓜子姫」などの昔話は、川上から流れきた不思議な桃や瓜の実の中から現われた小さ子の物語を主題とするが、さらには、上流から流れ下る珍らかなものは、ひとり木の実に限らず、小箱であったり壺であったりあるいは小犬であったりして、いわゆる「花咲爺」型の話群などにも連動してゆくのである。

関連して、水辺でものを洗いながら流れ寄る大きな桃の実を拾い上げたという昔話の老嫗の話は、水辺でものを洗い濯ぐ女性の姿勢が、多く川上から流下する聖貴なるものを待ち受ける古き巫女の痕跡を伝えていられるらしいことも見すごせない。前出の「丹塗矢」説話の異伝によれば、

初メ秦氏ノ女子、葛野河に出デテ、衣裳ヲ瀚濯ス、時ニ一矢アリ、上流ヨリ下ル、女子之ヲ取りテ還リ、戸上ニ刺シ置ケリ、

〔賀茂祭「儀式」一〕

下賀茂ト申スハ、松尾明神ノ御娘也、大井河ノ末ニ、松尾ノ前ノ流レニ出デ、川ノ辺ニテ物ヲ洗ヒ給フニ、鎗矢ノ流レ下ルヲ取り給ヒテ、……

〔耀天記〕

などとあって、この説話の処女が、川辺で水濯ぐ女としても語り伝えられていたことがわかる。また、前に引いた「秦河勝」伝説と場所も同じ大和の三輪川（初瀬川の下流）の岸辺は、古くから「衣洗へる童女」の伝承で有名であった。

亦ある時、天皇（雄略）遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の辺に衣洗へる童女有りき。其の容姿いと麗しかりき。天皇その童

女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ」ととひたまへば、答へて曰ししく、「己が名は引田部の赤猪子といふぞ」とまをしき。ここに詔らしめたまひしく、「汝は夫に嫁はざれ。今召してむ」とのらしめたまひて、宮に還りましき。

〔古事記〕 下巻

ついに一生を未婚のままに待ち続けたという「赤猪子」が、水濯ぎながら聖なる天子と初めて出逢ったときの水辺の伝承である。また、吉野川の岸辺で洗濯していた若い女は、その裾かかげた白い脛に悩乱して空から落ちた「久米の仙人」を迎え、その妻となったという。

後ニ、久米モ既ニ仙ニ成リテ、空ニ昇リテ飛ビ渡ル間、吉野河ノ辺ニ、若キ女、衣ヲ洗ヒテ立テリ。衣ヲ洗フトテ、女ノ脛マデ衣ヲ搔キ上ゲタルニ、脛ノ白カリケルヲ見テ、久米心穢レテソノ女ノ前ニ落チヌ。ソノ後、ソノ女ヲ妻トシテアリ。

〔今昔物語集〕 卷十一 第二十四

そしてさらに、あの浦島説話の異伝によれば、蓬萊の仙郷からこの人間世界に戻ってきた「浦島子」が、変わり果てた故郷でめぐり逢ったのは、衣を洗っていた百七歳の老嫗だったという。

嶋子乗レ舟、自帰去。忽到ニ故郷澄江浦。而廻ニ見旧里。草田変改而家園為ニ河浜ニ也。水陸推遷而山岳成ニ江海ニ也。(中略) 僅遇ニ於洗衣老嫗。而問ニ旧里故人。嫗曰。我年百有七歳。未聞ニ嶋子之名。唯從ニ我祖父之世。古老口伝而経ニ数百歳。

〔続浦嶋子伝記〕

いずれも、流水の川辺に洗い濯いでいて、聖なる神仙やめずらかなまればとの来臨を迎えた女性たちの物語であるが、この、水辺で「洗

濯」する、ものを洗いそぐという行為は、穢れた污垢を流水に洗い流す「禊祓」の姿勢であったと考えることができ、それゆえに、清浄な心身をもって聖なる神仙を迎える資格を身につけることができた、と伝えるのであろう。

たしかに、衣布を洗い濯ぎ晒すには、井堰などの溜り水にくらべて、常に流れて留まることのない流水のほうがより効果的であった。そして、

玉川に晒すてづくりさらさら何ぞこの子のここだ愛しき

〔万葉集〕 卷十四

絶えまなくせせらぐ清冽な流水に布晒す乙女への詩情は、美しい相聞歌にまで昇華する。

こうして、此処この地の水辺に流れ来て寄り着くものは、何処とも知らぬ秘境水界の奥から、この人の世に漂流してくる珍らかにして尊貴なる神格として受けとめられた。それは、海辺であれば遠く遙かなるわたつみの楽土・常世から、そして川岸であればその川上を遡る深山幽谷の奥の秘かな異郷から、この現し世の人間世界に、聖子・少童の姿をかりて幸と寿福と富とをもたらし運び寄せてくれるまればとたちなのであった。

四、去来する流れの掟と遡逆の呪

このように考えてくると、これらの古来の伝承説話に見られる「水流」への想いは明らかである。

流れくるもの・流れゆくもの。その流れの方向からいえば、常に一方から他方へ、上流から下流へと、いずれも、この人の世を中心基点として想念された一方通行の現象界であるが、そこにゆるぎなく貫ぬかれているのは、水の流れへの限らない期待である。即ち、寿福を此処に流し寄せ、禍凶を此処から流し去るといふ祈りでもある。それは人間の生命と生活に欠くことのできぬ「水」というものへの深い共感と感謝の想いを底流としながら、また、「流れる水は腐らず」という諺のように、川や海の有する流水の自然浄化の機能と効果を、永い経験則から体得した古き呪的な祈りであったのかもしれない。

もちろん、これと全く正反対に、不吉にして凶なるものが流れ寄り、寿福と幸が流れ去ってしまうこともまた、この世のもうひとつの側面の実相であろう。しかし古来の伝承説話の中には、そのようなおぞましき不吉なモチーフは意外なほど少ない。

流れて絶えることのない水の流れの靈妙さと、未知なる水源への憧憬と思慕、そして流れゆく地の果て・海原のあなたへの茫洋たる隔絶感と哀愁がそこにはある。「幸なるものは流れ来よ。凶なるものは流れ去れ」。いうまでもなくそれは、水の流れに託した遠き世からの常に変らぬ人々の祈りと期待と悲願であった。と同時に、古き呪的な詞章に斎い籠められた「かくあれかし」と祈るゾルレンの理念でもあったのであろう。

しかしまた、それとともに、いったんこの世から海彼の異郷へ流れ去りながら、またふたたびこの世に流れ戻ってきたという、遡逆・回

帰の伝承のもつ特異性をも見のがすわけにはいかない。いわゆる「異郷訪問説話」あるいは「仙郷淹留譚」などとよばれるモチーフの話題がそれで、古くは『記・紀』が伝える「ホオリノミコト(山幸彦)」のわたつみの国訪問神話、『日本書紀』『丹後国風土記』『万葉集』などに見られる「浦島子」の説話、あるいは垂仁朝に勅命を受けて「ときじくのかくのこのみ」を求めて常世国に渡り、その珍しき果樹を探し得て戻ってきたという「タジマモリ」の伝承などがそれにあたる。

この世から一度は別世界に去りながら、ふたたびこの世に回帰してきたこれらの人々の物語は、すべて、異界の禁忌と呪封を破り、異郷への自然の水流に逆らったがゆえとも思われる厳しい掟から、のがれられなかったと伝えている。つまり、本来、一方通行しかできぬはずのルートを、無理に引き返し往復したがゆえの罪の報いであった。

兄・海幸彦が拒むのを無理に懇請して、それぞれの狩・漁の道具を取り換えてもらったあげく、兄の大切な釣針を海に失くして返すことができなくなってしまう山幸彦は、後世ふうに言えば債務不履行とでもいうべきか。ひとから借りた貴重なものを遺失したという過ちを負う罪の人であるが、とくに、古代における専門の職掌部が秘蔵する生産量の具象である生産用具(釣針)を失くしてしまったその罪過は、やはり、一度は流されねばならぬ罰にあたるものであったと考えることができる。

海辺に出て泣き憂っていた山幸彦は、塩椎神という海路を司る老神のはからいで、堅く編んだ目無籠なしかぶまの小舟に載せられ押し出されて、

「味し御路」つまり順路の潮流に乗り、わたつみの国に流されてゆくのである。この小舟は、前出の蛭子が流された「葦舟」と相通するが、わたつみの神の女トヨタマビメと結ばれて、失くした釣針を探し得た山幸彦は、「劍持ちの神」一尋ワニの背に乗りふたたびこの世に戻ってくる。釣針を兄に返し、これと争い懲らしめ降伏させた山幸彦であったが、懐妊し夫のあとを追って上つ国に出てきたトヨタマビメの願いを聴かずに、その産屋を垣間見てしまったがために、トヨタマビメは「海坂を塞ぎ」て永遠にわたつみの国に戻ってしまい、その結婚生活は破綻した、と伝える。

浦島子もまた、いったん離れ去ったこの世に、あの世からふたたび立ち帰ってきた人として語られるが、これも、常世の禁制を犯したがゆえに三百余年の歳月の呪封の効果を失ない、瞬時にして瀕死の老翁となり果ててしまう、とされる。

タジマモリの話も、十年間という一応現世的な時間単位で語られながらも、彼がこの国に戻って来たときはすでに天皇は薨去した後で、彼は持ち帰った異郷の橋樹を陵墓に供え、慟哭しながらそのまま息絶えたと伝え、両界の時間的隔絶と厳しい掟は類話と共通する。

つまり、この世の住人でありながら、何らかの理由で異郷に去って行った人々が、いったん辿りついたあの世から、呪界の水流に逆らってふたたびこの世に「反転・回流してこようとしても、それら人間の再生・復帰の運命は厳しく規制・呪縛されていたのであって、異郷の掟は、いったんその異界を訪れてその住人としての資格と居住権を許容

されたのに、ふたたびそこを捨て去って人界に戻りゆこうとするものに対しては、決して生易しいものではなかったのである。

蓬萊の仙境に赴き至福・悦楽の日々を過ごしていた「浦島子」であったが、しだいに「外ハ仙宮ノ遊宴ヲ成スト雖モ、内ニ故郷ノ恋慕ヲ催ス『浦島子伝』」ようになり、ついに望郷の思いに堪えず、ぜひ一度故郷に立ち帰り、またすぐ仙境に戻ってきたいと願うが、それに対して神女は忠告し予言する。

婦の曰く、列なる仙の陬は、一たび去りて再び来りがたし。たとひ故郷に帰るとも、定めて往日のごとくにはあらざらむ、といへり。

〔本朝神仙伝〕

この隔絶と回帰不能の厳しい掟はほかにもある。たとえば、この「流水」のテーマとは直接係わりがないが、『記・紀』に伝えるイザナギノミコトの「黄泉国訪問神話」においても、その異郷の断絶の呪章を見ることが出来る。

是にその妹伊邪那美命を相ひ見むとおもひて、黄泉国に追ひ往きき。ここに殿のとざし戸より出で向かへし時、伊邪那岐命、語らひ詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り終へず。故、還るべし。」とのりたまひき。ここに伊邪那美命答へ白ししく、「悔しきかも、とく来ずて。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき我が那勢の命、入り来ませることかしこし。故、還らむと欲ふを、しばらく黄泉神と相論はむ。我をな見たまひそ。」とまをしき。

〔古事記〕上巻

有名な詞章であるが、この「よもつへぐひ」とは、黄泉国の火で調理した食事であって、これを食べてしまうと黄泉国の住人の資格になり切ってしまう、もうふたたび生きた人間界には戻れない、と信じられた。つまり、いったん死界に受け容れられ食事を饗応されたら、それはもうその霊界の住人となったのであって、そこからまた出てゆくことは許されない。それゆえにこそ、禁忌を破ってその死神となり果てた女神を目撃し黄泉国から逃げ出そうとしたイザナギは、凄まじい死神たちの急追・襲撃を受けることになるのである。

さらに、あの世とこの世とは、遙かな距離を隔てる異次元の空間であるとともに、また両界にそれぞれ流れる時間も異質であった。異郷での数年間はこの世での数百年の歳月に匹敵するとされた。呪的な空間の隔たりに対応して時間もまた呪縛されていたのである。この水の流れと時の流れに逆らって回帰・遡逆させようとする試みは、この世とあの世の厳しい隔絶の掟に背きその禁忌を破るがゆえに、いずれはみずから破滅させることでしか償うことはできなかったのだと考えるほかはない。

五、「曲水」の行事の源流

古代中国において、春三月三日に、文人詩客が曲折した流水に盃を浮かべて、その盃が自分の前を流れ過ぎない間に詩歌を作り酒を飲んだ、という閑雅な遊びがあった。これをふつう「曲水流觴」とか「曲水之宴」といい、この風流がわが国にも伝来し、古代の貴族社会に盛

行したことは有名である。

しかし、この「曲水の宴」という行事の古い伝承を探ってみると、そのもとものあり方は、決して単なる風雅の遊宴ではなかったらしいことがわかる。

晋武帝問_二尚書郎摯虞仲治_一、二月初三日曲水、其義何旨、答曰、漢章帝時、平原徐肇、以三三月初生三三女、至三日俱亡、一村以為怪、乃相与至水滨盥洗、因流以盥腸、曲水之義、蓋自_レ此矣、帝曰、若如_レ所談、便非嘉事也、尚書郎束皙進曰、仲治小生、不足_レ以知_レ此、臣請說_二其始_一、昔周公成_二洛邑_一、因_二流水_一泛_レ酒、故逸詩云、羽觴隨_レ波流、又秦昭王、三月上巳、置_二酒河曲_一、見_二金人自_レ河而出、奉_二水心劍_一曰、令_二君制_二有西夏_一、及秦霸_二諸侯_一、乃因_二此_一立_二為_二曲水_一、二漢相緣、皆為_二盛集_一、帝曰、善、賜_二金五十斤_一左_二遷仲治_一為_二城陽令_一、

〔五朝小説魏晉齊諧記〕七

この話には、古く「曲水」の起源について、奇怪・不吉な事件があり、これを水に流し破ったという「非嘉事」の伝承があったことをうかがわせ、それを強いて吉事の縁起に語り直したらしい痕跡がある。さらに、

三月三日曲水会、古禊祭也、漢禮儀志云、季春月上巳、官民皆聚_二渚于東流_一、水上自洗濯、祓_二去宿疾_一、為_二大梨_一不_レ見_二東流_一、為_二何水_一也、晋中朝云、卿已下至_二於庶民_一皆禊_二洛水之側_一、〔南齊書〕九
という記録に至っては、まぎれもなく「曲水の会」が「古キ禊祭」として、広く慣行されていた習俗だったことがわかるし、また、

翰曰、鄭国之俗、三月上巳之日、於溱洧兩水之上、執蘭招魂、
 祓除不祥、上巳即三日也、曲水者、引水環曲為渠、以流酒盃而
 行焉。
 (顏延之『三月三日曲水詩序』)

という記述でも、この「曲水」の行事の源流に古い祓除の信仰が深く
 かかり合っていたことが明らかである。とくに、この『曲水詩序』
 の「溱洧洧兩水ノ上ニ於イテ、蘭ヲ執リ魂ヲ招キ、不祥ヲ祓ヒ除
 ク」という一節は暗示的である。流水に臨んだその祝儀の場で、招魂
 と祓除を同時に祈念したというこの記述は、いわゆる流水の「去」と
 「来」に託す二つの想念が象徴的に集約されているからであり、実は、
 この去来一致の形が最も素朴な古型を伝えているのではなからうか。

不吉なるもの・禍なるものを水に流し、また、招魂とともに不祥を
 祓い棄てようとした祝念は、古き大陸においてすでに芽生えていたの
 である。

これに対してわが国の文献における「曲水の宴」の初見は『日本書
 紀』の顕宗天皇元年の条である。

三月の上巳に、後苑に幸して、曲水の宴(めぐりみづのとよのあかり)
 きこしめす。
 (卷十五)

とあり、このあとにも「二年の春三月上巳」「三年の春二月の丁巳
 の朔」に簡潔な記録が続くが、「曲水」の由来についての詳しい説明
 は何もない。その後たとえば『懷風藻』には、

五言。三月三日曲水宴。一首。

錦巖飛瀑激。春岫暉桃開。不憚流水急。唯恨盞遲来。

とあり、『和漢朗詠集』にも何首かの「曲水」に係わる詩文が見える。
 その中の有名な一首を引くと、

礙石遲来心竊待。牽流過過手先遮。

(卷上)

——上流から流れてくる盃が、途中の石にひっかかってなかなか自分
 の前まで来ない時は余裕と自信をもって待っているが、逆に、思いが
 けず盃が速く流れてくると、まだ作詩が未完成なのであわてて盃を手
 で遮ってみたりする——、という文人たちの遊びに興ずる心理の綾を
 詠じたこの詩には、もう、古い流水の招魂・祓除の祝儀の痕跡はまっ
 たく残っていない。このほかにも中古以降の詩文に「曲水の宴」や「上
 巳の節供」などが引用されることはあっても、いずれも盃を水に流す
 風雅な故事として語られるだけである。そしてその宴遊もしだいに廃
 れ、中世に至ると、

曲水・重陽ノ宴モ絶エハテ、白馬・踏歌ノ節会モ行ハレズ、形ノ如
 クノ儀バカリ也。
 (『太平記』 卷第二十一)

という有様となってしまふ。

かくて、古き世の「曲水」の祝性がしだいに形のみとなり、本来は
 罪穢れを託して水に流し棄てたはずの「形代」が、いつとはなく「盃」
 の形となって宴遊化し、もっぱら酒興・詠歌の風流の遊戯に変質して
 いった過程を推し量ることができるが、しかし、その行事が三月三日
 の上巳の日に行なわれるという慣習は永く変わらなかった。たぶんそ
 れは、古き中国における「禊祭」の祝儀の想念が強い底流として伝え
 られていたからであらうし、それゆえにこそわが民間においても、い

わゆる「上巳の祭り」に罪や穢れを人形に託して水に流しやる「雛流し」の習俗が、後世にまで秘めやかに伝えられていったのであろう。

六、流水の伝承と賀茂の一族

思えば、冒頭に引いた鴨長明の『方丈記』の一文もまた、実はこの流水の系譜と深くかかわり合っていることに気づく。長明の「流水」の発想が単なる偶然とは考えられないというその背景には、彼の「鴨」という氏姓の出自が、かの丹塗矢説話の始祖伝説を捧持した古き「賀茂」の一族にまぎれもないという事実がある。長明の家系は代々の祠堂であり、彼の父・鴨長継も、河合社から賀茂御祖神社の禰宜となつた人であった。

賀茂氏の氏祖神話によれば、祖神・賀茂建角身命は、大和の葛城山の峯からしだいに諸地を遍歴して、ついに山代川つまり今の木津川の河畔に至り、その流れに添って北に進んだという。そして、葛野河と賀茂河との会ふ所に至りまし、賀茂川を見遙かして言りたまひしく、「狭小くあれど、石川の清川なり」とのりたまひき。よりて、名づけて石川の瀬見の小川といふ。その川より上りまして、久我の国の北の山基に定まりましき。その時より、名づけて賀茂と曰ふ。

〔山城国風土記〕逸文

これがのちの賀茂神社の起源だといふのである。そしてこの「石川の瀬見の小川」こそ、前述した丹塗矢説話でタマヨリヒメが川遊びし、丹塗矢が川上から流れ下ってきたと伝える、その呪的な流れ「賀茂

川」にほかならなかった。

これら賀茂氏の伝承によれば、「丹塗矢」は「火雷神」であり、その子の賀茂の祭神は「賀茂別雷命」で、いずれも「雷神」である。雷神の本質は「天神」であるとともに雨水を掌る「水神」でもあった。つまり賀茂氏とはもともと「水」の信仰を捧持し伝承した氏族だったといえよう。

古代以降、諸国に分布・定着して「賀茂」「加茂」「鴨」等を名のる宗族・家門は実に多岐多彩であつて、それらを今ここで検証する余裕はないが、ただ、前述の氏祖神話に関連して見逃せないことがある。というのは、「丹塗矢」説話における「処女」の出自が、実は大陸系の渡来氏族らしいことなのである。『山城国風土記』によれば、タマヨリヒメの出自は、

賀茂建角命、丹波国の神、伊可古夜日女にみ娶ひて生みませるみ子、名を玉依日子と曰ひ、次を玉依日売と曰ふ。

とあり、また別伝によれば、前出のように「松尾明神の御娘也（『耀天記』）とか「秦氏ノ女子（『儀式』）」などとあつた。

古く丹波・但馬の一带は、「天日矛」の神話などを始め大陸系渡来氏族が定着してその文化や伝承が注目される地域である。『新撰姓氏録』には、

丹波史。後漢靈帝八世孫孝白王之後也。

（左京諸蕃 上）

とあり、平安朝以降の医家として有名な「丹波氏」は「坂上氏」の流れであるが、その坂上氏も『姓氏録』によれば、

坂上大宿禰。後漢靈帝男延王之後也。

(右京諸蕃 上)

で、同じ後漢系の渡来系氏族であった。

また「秦氏」についても『姓氏録』には、

大秦公宿禰。秦始皇帝世孫孝武王之後也。

(左京諸蕃 上)

を始め「秦」を名のる氏族は二十に余り、いずれも秦の始皇帝の裔とされる渡来系豪族であった。さらに「松尾明神の御娘」についても一考しよう。いうまでもなく「松尾明神」とは、京都・西京区の「松尾大社」のことであるが、この神社は、

松尾神社 式内

大山咋神・市杵嶋姫神ヲ祭ル、文武帝大宝元年、秦忌寸都理、神殿ヲ松尾ニ建テ、又、松崎日尾ニ在ル胸形中都大神ヲ遷シ、阿礼ヲ立テ齋子ヲ置キ奉仕ス、之ヲ本祠ノ始トス。〔平安通志〕卷三十一

とあるように、秦氏の地盤に秦氏が建立・奉斎した神社だったのである。つまり、「丹波」「秦」「松尾」とも、いずれも古代の渡来系氏族との関連が濃厚であって、「丹塗矢」を迎えたタマヨリヒメの出自は、渡来系氏族と密接な関係があったと考えざるを得ない。さらに、この「丹塗矢伝説」が『本朝月令』に引く『秦氏本系帳』にも伝えられていることは、その強い傍証ともなる。

秦氏本系帳云。(中略) 建角身命娶丹波国神伊賀古夜比売。生子。曰玉依日古。次曰玉依日売。於石川瀬見小川遊為時。丹塗矢自川上流下。乃取挿置床辺。遂感孕生男子。(中略) 乃因外祖父之名。号賀茂別雷命。今所謂丹塗矢。乙訓郡社坐大雷命。在賀茂。

建角身命也。丹波神。伊賀古夜日売也。玉依日売也。三柱神者。蓼倉里三井社坐也。妹玉依日子者。今賀茂県主等遠祖也。

〔本朝月令〕

古来、近畿圏一帯に盛強な地盤と経済力を有していた渡来系豪族「秦氏」の「本系帳」に、丹波国の神裔として「賀茂氏」の氏祖伝説が語られていることは、決して偶然ではない。それはたぶん、これら帰化系渡来氏族が古き大陸の祖禰から連綿として語り伝えてきた神話・伝承のモチーフの一つであったのであろう。

ということとは、前出の「曲水」の行事・伝承に見られるような古代中国の流水の想念が、これら渡来系氏族によって招来・伝誦されて、わが神話・説話の中に導入・定着していったかもしれない。その影響と可能性を無視できないということでもあろう。

その賀茂の末裔・長明が「ゆく河の流れ」と誌したその川はどこだったのであろうか。一般には、そのころ長明が庵を結んでいた日野の法界寺の外山に近い宇治川であろうと考えられているが、しかし、長明の脳裡には、その発想の奥には、いつも賀茂一族の氏祖神話とその故郷・賀茂川の瀬音が、淙々と鳴り続けていたのではなからうか。古き賀茂の神裔とは、このような流水の神話から生まれ、その清流の河畔に定住して祖神を斎き、その石川の瀬見の小川の信仰と説話を伝えてきた一族だったからである。